

## はしがき

幕末の長州藩士高杉晋作は慶応三年（一八六七）四月十三日、二十九歳で病死した。正確には、二十七年八カ月ほどの短い生涯だった。晋作が没した年の十月に大政奉還が行われ、十二月には王政復古の大号令が発せられて、天皇を戴く新政権が発足する。

私と「高杉晋作」との出会い、小学四年生だった昭和五十二年（一九七七）一月に放映が開始されたNHK大河ドラマ「花神<sup>かしん</sup>」である。中村雅俊さん演じる晋作は無鉄砲で若々しく、テレビ画面から飛び出して来そうな魅力があった。ところが十代の後半、ようやく手に入れた『高杉晋作全集』全二冊（昭和四十九年）（『全集』と略称）で接した晋作の書簡や日記からは、武士身分にこだわり、保守的な思考が強く、生真面目で神経質そうな横顔が垣間見え、ドラマや小説とはずいぶん違うものだと思われた。そのギャップを発見する面白さが、私を晋作伝記の研究へと進ませたとと言っても過言ではない。

その頃、「明治維新」の性格規定に直結するような奇兵隊の問題はともかく、晋作と言えば小説やドラマ中の英雄・偉人であり、歴史の研究対象としては、あまりみられていなかったと思う。伝記と言えば村田峰次郎『高杉晋作』（大正三年）や横山健堂『高杉晋作』（大正五年）のような、戦前に同郷人が顕彰的立場で著したものが主で、戦後歴史学の中のものでは中公新書の奈良本辰也『高杉晋作』（昭和四十年）くらいしかなかった。そのうち岩波新書から田中彰『高杉晋作と奇兵隊』（昭和六十年）が出たが、これは晋作の伝記というより、維新史の中に奇兵隊をどう位置づけるかが主題だった。

晋作のまとまった遺稿集としては、詩文を集めた『東行遺稿』全二冊（明治二十年）が最初である。つづいて書簡や日記などを加えた『東行先生遺文』（大正五年）（「遺文」と略称）が東行先生五十年祭を記念して出版され、それは戦後、先述の『全集』全二冊としてリニューアルされた。これらは晋作伝記研究の基本文献としての価値を持つのだが、遺漏なども多い。それを補うべく私は、『高杉晋作史料』全三冊（平成十四年）（原則として『史料（巻数）』と略称）をまとめた。その後見つかった史料などは『久坂玄瑞史料』（平成三十年）の中に、『高杉晋作史料』補遺（「補遺」と略称）として収めている。

昭和から平成に入り、幕末維新史の研究は飛躍的に進んだと言われるが、平成の半ばになると、拙著『高杉晋作』（文春新書、平成十四年）、梅溪昇『高杉晋作』（吉川弘文館・人物叢書、平成十四年）、青山忠正『高杉晋作と奇兵隊』（吉川弘文館・幕末維新の個性7、平成十九年）、海原徹『高杉晋作』（ミネルヴァ書房・日本評伝選、平成十九年）など、歴史研究の成果としての晋作評伝が相次いで出版されるようになった。

私が三十五歳の時に著した文春新書『高杉晋作』は平成二十六年、角川ソフィア文庫『高杉晋作——情熱と挑戦の生涯』となり、有難いことに今日まで版を重ねている。しかし、同書は文庫判二百五十頁余りの小冊だから、割愛した部分も少なくない。また、執筆時から二十数年の間に、私の考えが深まったり、変わった部分もある。そのため、新しい晋作の評伝を、今度はできるだけ詳しく書いておきたいとの思いが、年を経るごとに募っていた。このたび機会をいただいたので、いま一度「高杉晋作」二十九歳の生涯を辿ってみたいと思う。

なお、元号は、原則としてその年の途中で改元されても一月一日から改めた。ただし、引用などの場合はその通りではない。振り仮名は、一般的と思われる方にした。年齢は原則として数えである。史料引用にあたり、読みやすくするため送り仮名を付したり、漢字を仮名に、カタカナをひらがなに直したりした。詩や書簡の読み下しは『全集』を参照した点が多い。本編に登場する人名は原則として敬称を略した。